

茅ヶ崎市立柳島小学校

研究テーマ：もっとやりたい！もっと知りたい！

～協働的な学びを通じた意欲的に学ぶ児童の育成～

1、実践の目的

本校の子どもたちは素直でやさしい子が多く、どのクラスでも友だちと楽しく笑いあう姿が見られる。一方で、学習に目を向けると、個人差が大きく、与えられた課題をこなすことを学習ととらえる受動的な姿勢が見られるとともに、どのクラスにもなかなか授業に向き合えない子がいるという課題が見られた。学校という場を見つめ直してみると、「勉強しなければならない」「課題を終わらせなければならない」といった意識が、子どもたちの中に強く根付いていることが分かった。そして、それは私たち教師自身の責任であると考えた。

学校とは、このような場でよいのだろうか。子どもたちにとって、学校は本来、「〇〇をしなければならない場所」ではなく、「他者と関わり合い、豊かに学び合う場所」であるはずだ。やらされるという感覚ではなく、主体性をもって、意欲的に学んでいると感じられる場所にしたい。こんな思いから、「もっとやりたい！もっと知りたい！～協働的な学びを通じた意欲的に学ぶ児童の育成～」を研究テーマに設定し、その実現に向けては、まず、私たち「教師」が「もっとやりたい！もっと知りたい！」と思えるようにすることが不可欠であるとの考えの下、研究をスタートさせた。

2、実践の内容



研究テーマの実現に向けて、「授業研究」と「学級経営」を校内研究の両輪とし、子どもたちの意欲や主体性、教師の願いや思いといった「やりしり」を大切にしながら、研究に取り組んだ。これまでに、教材や発問の工夫、授業における子どもの見取り、教師の子どもたちへの関わり方など、様々なことについて考えてきた。子どもたち・保護者への学習評価の伝え方を含む学習評価の方法についても、「どうしたら子どもたち・保護者にとってよりよいものになるか」を中心に議論を重ね、改善を図ってきた。そして、学校行事、特別活動、新型コロナウイルス感染症対策を含むカリキュラム・マネジメントに際しても、「やりしり」を中心に据えてきた。

(1) 授業研究

柳島小学校の授業研究では、それぞれの教科の授業を通して子どもたちを育成していくこと、それぞれのクラスの子どもの姿が異なることなどの理由から、研究教科を一つに限定していない。このことにより、教師が「やらなければならない研究ではなく、やりたい研究」として取り組み、

授業者それぞれが思い描く「やりしり」を大切にしながら、授業実践、学級経営をしていくことができる。また、授業者の長所を授業で生かすやすくなることにより、子どもたちの「もっとやりたい！もっと知りたい！」という意欲の高まりにつながっていかれると考えた。

（２）授業開発

令和３年度には、子どもたちにとって身近な「柳島の海」を教材として、各学年で授業開発を行った。

６年生はビーチクリーンをはじめ、海洋ごみの原因の多くを占める町なかのごみ拾い、小出川のごみ拾いなどを行った。タイルアーティストの中村ジュンコさんにご協力いただき、拾ってきたごみを使って作品を作り、地域のショッピングモールである「BRANCH2」に展示させていただいた。４年生は海を題材として、クラスで詩を作り、音読に取り組んだ。子どもたちの思いが表現されたとても素敵な詩が作られていた。

「教えなければならぬ」ことに縛られず、子どもたちと共に学びを作り上げていく、とても良い機会となった。

（３）研修会

○校内研究全体会

（４月）（９月）（１０月）（３月）

○夏休み自主研修

体育実技研修（マット・跳び箱）

ICT活用研修（ロイロノートの活用など）

授業づくりワークショップ（教材開発）

○令和元年度

講演会「授業UD化の方法」

明星大学心理学部心理学科 小貫 悟 教授

○令和２年度

講演会

「子どもへのまなざし」

茅ヶ崎虹の丘幼稚園園長 山田 昇先生

３、実践の成果

（１）教師として得られた成果

本研究を通して、互いに授業を見合える風土、授業についての質問やアドバイスを気軽にし合える職員室の雰囲気、経験に関わらず、それぞれの授業の見取りを共有し合える協議会、そして、子どもたちを中心に据えた授業や教育活動が生まれた。

どれも当たり前のことのようにはあるが、実現するのは容易なことではなく、とても貴重な本校の研究成果だと考えている。

（２）子どもたちの変容

私たち教師が、子どもたちに何かをさせる授業ではなく、子どもたちが主体性をもって、意欲的に学ぶことを大切にし、子どもたちを中心に据えた授業や教育活動を展開できるようになったことによって、子どもたちが一人ひとりの「その子らしさ」を認め合い、友だちと考えを出し合いながら、授業を楽しむ姿が見られるようになった。

そして、一人ひとりが自分の力を出して問題解決をしたり、助け合いながら学習理解を深めたりする経験を積むことができた。これは、今後も子どもたちが意欲的に学びに向かうことにつながる貴重な経験だと考えている。

４、今後の展開

個人の学力差が大きく、基礎的な学力の定着が十分でない子が多くみられるという課題が残されている。今後、学校全体として彼らを支援していくことが必要だと考えている。

教職員がみんなで知恵を出し合い、彼らをサポートしていけるような体制づくりや、保護者と連携しながら児童の学びを支えていく仕組みづくりを行っていきたい。